記　事

消　息

第26回富士川游学術奨励賞を受賞して

川原由佳里

日本赤十字看護大学

偉大な医学史家，富士川游先生のお名前を冠した賞をいただき，大変に名誉に思います．振り返ってみますと，かつて5史学会（現6史学会）で発表をさせていただいた際，医史学会の先生方から，とても力強い励ましの言葉をいただきました．そのことが以来，私の研究の道のりを，ずっと支えてくれていたと思います．感謝の気持ちは言い尽くせないくらいです．「奨励」賞という言葉の意味を心に刻み，これからも精進してまいります．

研究を始めたきっかけの一つに，私の母校であり，現在勤めている日本赤十字看護大学で看護の歴史の授業を担任することになったことがあります．母校で歴史を教えることになり，教師として先の大戦の赤十字の看護についてどのように語るかが，大きな課題になりました．事実，体験記に記されているように，戦時中の赤十字の先輩方のご苦労はたいへんなものです．その一方で，当時の日赤の看護についての言説はさまざまで，たとえば人道に基づく実践であった，あるいは戦争に加担し協力したなど，なかには互いに相容れないものもありました．学生たちもやがて，この戦争で苦労をされた先輩方の後輩であることを意識するかもしれないと思いますと，先輩方の苦労と犠牲，その意味をどのように教えるのかは，とても責任の重いことに思えたのでした．

折よく，第二次世界大戦中の日本赤十字社救護班の資料が調査可能になりました．貴重な報告書です．すでにご高齢でしたが，元救護看護婦の先輩方15名に直接インタビューをすることもできました．ですが戦後生まれの私には，それだけで十分な理解に至ったという気持ちにはなれませんでした．むしろ当時の時代背景，軍衛生や赤十字の制度，さらには特定の地域における戦闘の経過を知ることに時間をかけました．撤退する道を閉ざした戦争の愚かさ，敗軍のみじめさ，軍衛生と赤十字の関係の難しさもそうですが，当時の日本における女性の地位，日赤看護婦としての誇りも知りました．当事者たちの体験はそのプロセスを通じて，より立体的に浮かび上がってきたと思います．

同じビルマで日本軍と交戦していた英軍の看護婦について調べ始めたのは，ある先生から，日本のことだけを調べていては不十分との助言があったからです．そこで知ったのは，日本の軍隊によるおぞましい加害の事実であり，欧州各国の植民地支配の理不尽きわまる実情でした．感情的に受け入れがたいことを受け入れていくなかで，自身がいかに，日本にも諸外国にも，そうあってほしくないと思っていたかを知りました．その意味でも，戦争はあってはならないとつくづく思います．

英国人看護婦の体験記には，日赤看護婦のそれにはあまり見られない語りがあります．たとえば日本軍による敵対行為や収容所での待遇の悪さ

によって，白人が不当な苦しみを与えられたことに激しく怒りながらも，その一方で植民地の貧しい人々や子どもを多数兵士として動員し，死傷させたことには特に感情をともなって言及していなかったりします．軍看護の無意味と思われるような規律の厳しさを批判し，看護婦の動員が民間医療の崩壊を招いたことも率直に語っています．日赤看護婦も同様のことを体験したと思いますが，ほとんど語らず，きわめて控えめに述べるにすぎません．言葉にすることが憚られた理由はいろいろあるのでしょう．論文中では，戦争では軍隊に近い組織になるほど，戦争の現実を語ったり，軍隊を批判したりしにくくなるとし，一方で戦傷病者の看護も単なる人道的実践として語るならば見えてこない真実があるのではないかと投げかけましたが，それだけでもないような気がしています．戦争を直接体験した世代が私たちに伝えたかったことと共に，彼らにより語られなかったことと語られなかった理由について思いを巡らせながら，これからも戦争と看護を考えていきたいと思います．

今後ともどうぞご指導よろしくお願いいたします．

第32回矢数医史学賞を受賞して

西迫　大祐

沖縄国際大学 法学部

この度は，拙著に矢数医史学賞を賜りましたこと深く御礼申し上げます．栄誉ある賞を頂き大変光栄です．日本医史学会および選考委員の先生方に心より御礼申し上げます．本来，授賞式にてお話させていただくところ中止となり大変残念ではございますが，コロナ禍において，感染症研究である拙著がこのような形で受賞させていただくことは，ある意味でふさわしいのかもしれません．

先日『日本醫史學雑誌』にて渡部幹夫先生に書評を頂きました．合わせて御礼申し上げます．渡部先生もお書きになった通り，私が本書を執筆している時に，今日のパンデミックは全く予想しておりませんでした．もちろんSARSやMERSなどの流行があったので，局所的な流行は高い確率で起きるとは思っていましたが，全世界的なパンデミックが起こり，まだ収束のめどが立っていないことに対して，大変驚いています．

本書「あとがき」にも書いたように，拙著は2008年に執筆した予防接種に関する論文をきっかけに，指導教授である土屋恵一郎先生の助言を受けて，2014年に提出した博士論文『感染症と法の歴史』がベースとなっています．その時の締め切りが1月だったかと思いますが，すぐにエボラ出血熱の大流行が起きました．テレビで見たアフリカの光景は，拙著で研究した18，19世紀のパリと重なるところがあり，不思議な思いでいたのを覚えています．

博士論文は企図は良かったと思いますが，上手くまとまっておらず，全体としてきちんとした形にするために，手直しすることにしましたが，そのために4年間悪戦苦闘することになりました．約2世紀という長い歴史を対象としたために，全体として上手くまとめるのに非常に苦労いたしました．しかしこの間に，エボラ出血熱についてのニュースを見たり，フレデリック・ケックの『流感世界』を読むなど，研究をまとめることが